

属性可能を表わす“能／可以V”をめぐる対照研究方法論

—日本語・フランス語の視点から—

A Methodology for a Contrastive Study of “*neng*／*keyi*V” Forms Expressing Attributability in Chinese

: From the Point of View of Japanese and French

成戸 浩嗣 Koji NARUTO

(現代マネジメント学部)

抄 録

成戸 2021 では、フランス語の受動的代名動詞表現を主たる考察対象とし、それに対応する日本語の「V(ラ)レル」表現、自動詞(可能動詞を含む)表現との比較を通して「受け身」、「可能」、「自発」について考察を行なうための着眼点、分析方法、予測される結論などを探った。考察の過程でとり上げられた「可能」は無情物(モノ)の特性を述べる「属性可能」であり、同じ表現形式が表わす他の働き、すなわち「受け身」、「自発」との間に連続性が観察されるケースもみられた。一つの表現形式がいくつかの働きをになうということは、言語においてしばしばみられる現象であり、それぞれの言語において各形式が独自の守備範囲を有し、異なる言語間ではそれぞれの働きの一部分に共通点・相似点あるいは接点が存在するために対応関係が成立するのである。そのような対応関係が成立する要因を探ることは、それぞれの形式が有する働きをより厳密に記述することにつながるとともに、「受け身」、「可能」、「自発」がそれぞれの言語においてどのように規定されているか、ひいてはそれらの概念が言語の枠を越えてどのように普遍化されるかについて明らかにすることにもつながる。

成戸 2021 でとり上げたフランス語の受動的代名動詞表現、日本語の「V(ラ)レル」表現、自動詞表現には「属性可能」を表わす働きがあったが、このような働きをになうと思われる中国語の表現としては、

(1) 这块豆腐能(ming)吃吗? / この豆腐ハ食ベラレルか。(讚井 1996:59)

(1)' 这块豆腐可以(kan)吃吗? / この豆腐ハ食ベラレルか。(同上) ※日本語訳は筆者

のような“能／可以V”形式をとるものが存在する。(1)、(1)'の中国語表現は、無情物について述べる可能表現である点において上記の日仏表現との間に共通点・相似点を有するため、日仏二言語の対照作業を通して得られた属性可能に関する知見は、中国語の“能／可以V”表現の働きについて考察を行なうのにも応用できそうである。本稿は、このような観点から中国語の“能／可以V”表現と「属性可能」について考察を行なうための着眼点、分析方法、予測される結論などを探ることを目的とする。

キーワード

属性可能 (attributability) 受け身 (passive) 可能 (possible) 自発 (spontaneous)
受動的代名動詞 (passive pronominal verb)

目 次

- 1 属性可能を表わす中国語・日本語の表現形式
 - 1.1 無情物の属性を表わす“能／可以V”表現
 - 1.2 日本語の属性可能表現

- 2 “能／可以V”表現の諸特徴
 - 2.1 “能／可以V”表現が表わす属性可能
 - 2.2 “能V”、“可以V”の使い分け
- 3 “能／可以V”表現の受け身的性格
 - 3.1 「主題＋説明」と「意味上の受け身」
 - 3.2 フランス語の受動的代名動詞表現との比較
- 4 おわりに

1 属性可能を表わす中国語・日本語の表現形式

1.1 無情物の属性を表わす“能／可以V”表現

“能／可以V”表現が表わす意味の一つとして、《現代汉语八百詞》(“可以”、“能”の項)》、『中国語虚詞類義語用例辞典(“能 会”の項)』のように「用途」が挙げられることがある。「用途」を表わすもののうち、“能V”形式をとるケースとしては(1)のほか

(2) 这种蘑菇能吃。／この茸ハ食ベラレル。
(呂雷寧 2006:58)

(3) 这个酒瓶子能当花瓶用。
／この酒の瓶ハ花瓶として使エマス。
(『中国語虚詞類義語用例辞典』“能 会”の項)

のようなものが、“可以V”形式をとるケースとしては(1)’のほか

(4) 牛肉可以生吃。／牛肉ハ生で食ベラレル。
(古川 2001:112 を一部修正)

(5) 这种锁子可以用万能钥匙打开。
／この種の錠ハ万能キーで開けるコトガデキマス(開けラレマス)。
(張麟声 2001:101 を一部修正)

のようなものが挙げられ、いずれも日本語可能表現との間に対応関係を有している。これらの表現における無情物は、Vが表わす動作の客体となりえるものである。

また、“能V”形式の

(6) 橘子皮还能做药。
／ミカンの皮カラ薬を作るコトモデキル。

(《現代汉语八百詞》、『中国語文法用例辞典』“能”の項)

(7) 木头能盖房子。
／木材デ家を建てるコトガデキル。
(渡辺 1999:150) ※日本語訳は筆者

(8) 这种胶水能粘玻璃和瓷器。
／この接着剤デガラスと陶磁器をくっつけるコトガデキマス(くっつけラレマス)。
(『中国語虚詞類義語用例辞典』“可能得”の項を一部修正)

(9) 这支毛笔能画画儿吗？
／この筆デ絵を描くコトガデキル(描ケル)だろうか。
(《現代汉语八百詞》、『中国語文法用例辞典』“能”の項を一部修正)

や、“可以V”形式の

(10) 木材可以造纸。
／木材カラ紙を造るコトガデキル(造レル)。
(相原 1997:48 を一部修正)

(11) 这里的土可以用来烧砖。
／ここの土ハ煉瓦造りに使うコトガデキマス(使エマス)。
(張麟声 2001:101 を一部修正)

(12) 废纸做成纸浆，可以造纸。
／紙くずハパルプにして、再度紙を作るコトガデキル(作レル)。
(《現代汉语八百詞》、『中国語文法用例辞典』“可以”の項を一部修正)

における中国語表現の場合には、無情物はVが表わす動作の材料 or 道具となりえるものであり、客体となりえるものを表わす名詞はVの目的語となっている。これらに対し、

(13) 姜糖水**能**治感冒。

／ショウガと黒砂糖のスープハ風邪を治**セ**マス。

(『中国語虚詞類義語用例辞典』“可能得”の項)

の場合には、無情物がVの表わす動作の道具となりえるケースであると同時に、それがもつ効果を表わす点においては

(14) 这种东西**能**诱发癌症。

／この種のものハ癌を引き起こす(ことがある)。(相原 1997:36 を一部修正)

と同様であり、無情物を主体となりえるものに解することも可能である。このことは、相原 1997:36 が(14)のようなケースについて「この“能”は蓋然性を表しつつも、やはり主語の具有する『能力』を表しているのである」としていることから理解できよう。

ところで、成戸 2019b:109、110 で紹介したように、日本語可能表現は「願望」を出発点とするものであり、「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」は意志動詞と組み合わされるのに対し、中国語の“能”はそうではない。このため、(13)における「ショウガと黒砂糖のスープ」は“姜糖水”に比べると、擬人化の度合がより強いのではなかろうか。同様のことは、呂雷寧 2006:57、同 2015:145-146 が、それぞれ「機械などの性能に関する可能」、「事物の属性(内的要因)に基づく可能」を表わす例として挙げている

(15) 这架起重机最多**能**吊起 6 吨重的货物。

／この起重機ハ6 トンまで物が上げ**ラ**レル。

(呂雷寧 2006:57、63、同 2015:146、森田 1989:1214)

や、『中国語虚詞類義語用例辞典(“能 会”の項)』が「用途」を表わす“能”の例として挙げている

(16) 这台文字处理机**能**打中文、英文和日文。

／このワープロハ中国語、英語、日本語が打**テ**マス。

(『中国語虚詞類義語用例辞典』“能 会”の項)

についてもあてはまると考えられる。これらのことは、張麟声 2001:101 が

(17) このクレーンハ 300 トンのものを上げる**コト**ガ**デ**キル。(張麟声 2001:101)

を「主語＝動作の擬似主体のケース」としていることや、日本語可能表現について述べた『現代日本語文法②』:278 に、

(18) このパソコンハ大量のデータを処理**デ**キル。(『現代日本語文法②』:278)

は道具(無情物)を表わす「パソコン」という名詞が可能文の主語になり、無情物が擬人的に能動主体としてあつかわれている旨の記述がみられることからヒントを得たものであるが、同じく機械の性能を表わす表現であっても、客体をとらない動詞を用いた

(19) 火车每小时**能**/可以跑 60 公里。

／列車ハ時速 60 キロで走る**コト**ガ**デ**キル(走**レ**ル)。(相原 1997:47 を一部修正)

(20) 水**能**变成冰。／水は氷に**ナ**レル。

(相原 1997:37)

の日本語表現における「列車」、「水」は、「走る」、「氷になる」の道具にはなりえず、擬人化の度合いはさらに強いと考えられる。

一方、郭春貴 2001:35 が「条件や許可によりできる」ことを表わす“可以V”表現の例として挙げている

(21) 那个操场很大，**可以**踢足球。

／あのグラウンドハ広いので、サッカー**ガ**デキル。(郭春貴 2001:35)

の日本語表現における「あのグラウンド」は、空間性が極めて強いものの(「グラウンド」を空間名詞とみる

ことができる)、スポーツをする施設としての側面も備えているため、この点に着目すれば「サッカーをする」ために使用する道具に解される余地がある。

日本語可能表現の場合とは異なり、中国語の“能”と組み合わせられる動詞は、前述したように意志動詞に限定されないため、“能V”表現における無情物が擬人化されているか否かの問題は生じないとみるのが妥当であり、この点は“可以V”表現についても同様であると考えられる。“能/可以V”表現における無情物が客体、材料 or 道具、主体、空間のいずれになりえるものであるかということは、Vが表わす動作との意味関係による区別であり、表現全体が無情物の「用途」を表わす点において変わりはない²⁾。このため、無情物を表わす成分にVとの関係を示す成分が付加されていないことをも考え合わせると、これを「主題」と位置づけるのが妥当であるように見受けられる。このことは、(21)のように前件が形容詞述語であるケース、すなわち“很大”、“可以踢足球”がいずれも“那个操场”について述べる部分であり、両者は並列関係にあるケースをみれば理解しやすい。無情物を「主題」とすれば、“能/可以V”の部分はこの対する「説明」ということになる³⁾。このような考え方が中国語の実態に合っていることは、例えば

(22) 明天**不能**去。(明日は行くことができない。)
(荒川 2003:205)

(23) 这个**不能**吃。
(これは食べることができない。)(同上)

からもみてとれよう。表現の前提となる客観的事実において、(22)の“明天”が“去”との間に直接的な関わりをもつことはなく、表現全体は“明天”についてどうであるかを述べている。また、(23)の場合、“这个”は“吃”の客体になりえるものの、表現全体は“这个”についてどうであるかを述べるものとなっている。このことは、例えば

(24) 大字笔写大字, 小字笔写小字。
(太筆で大きい字を書き、細筆で小さい字を書く。)(大河内 1973:50)

(25) 大鱼吃小鱼, 小鱼吃虾米。
(大きな魚は小魚を食べ、小魚は小さなエビ

を食べる。)(同上 1997:129)

※日本語訳は筆者

のような対比表現において一層鮮明である。いずれも非可能表現ではあるものの、大河内 1997:129 が(25)について“大鱼”の説明、題述文として理解する方が当たっている」としていることからみてもとれるように、実線部はそれぞれ前件、後件において主題の位置を占めている⁴⁾。

ところで、前述したように、本稿の主たる考察対象である“能/可以V”表現は、無情物の用途について述べたものである。「用途」とは一定の目的をもって使うことを前提とした概念、換言すれば、動作主体の側からみた事物の「性質=属性」ということになるため、“能/可以V”表現は、無情物の性質としての可能を表わす「属性可能表現」であるといえることができる。このような考え方は、周国龍 2012:11 が日本語の属性可能表現についての記述の中で、「動作主の行為実行の意志、能力の有無は焦点になっておらず、関係する事柄に行為実現に関する素質が備わっているか否かが属性可能である」として

(26) 这个酒**能**喝。
/ この酒ハ飲メマス。(周国龍 2012:11)

という対応例を挙げていることや、同:14-15 に

(27) 这辆车**不能**开。
/ この車ハ運転デキマセン。(同上:14)

の中国語表現は属性可能に解されやすいのに対し

(28) 这辆车坏了, **不能**开。
/ この車ハ故障して、運転デキマセン。
(同上)

のそれは属性可能、条件可能のいずれにも解される旨の記述がみられることにもあらわれている⁵⁾。ちなみに、《现代汉语八百词(“可以”の項)》が“可以”の用法として“有某种用途”を示し、その例として無情物が材料を表わす(12)および

(29) 棉花**可以**织布, 棉籽还可以榨油。
/ 綿花カラハ布を織るコトガデキ、種子カラハ油をしぼるコトガデキル。

(《現代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“可以”の項)

の中国語表現を挙げる一方で、無情物が空間を表わす

- (30) 这间屋子**可以**住四个人。
／この部屋ニハ4人住**メル**。(同上)

の中国語表現を“表示可能”の例として挙げていることから、無情物が非空間(モノ)、空間のいずれであるかによって「用途」を表わす表現であると認めるか否かの判断が分かれていることがみてとれそうである。しかし、(30)の“这间屋子”は(21)の“那个操场”と同じく空間性が極めて強く、かつ、表現全体がそれについての特性を表わしている点においても(21)と同様であるため、属性可能表現であると考えてさしつかえない。また、郭春貴 2001:34 が「条件による可能」を表わす“能V”表現の例として挙げている

- (31) 这床**能**睡两个人。
(このベッドは2人寝られる。)
(郭春貴 2001:34)

- (32) 这车**能**坐五个人。(この車は5人乗れる。)
(同上)

の場合には、無情物が空間的な性格を有するモノであるが、同じく属性可能表現と位置づけられる⁶⁾。これらのことは、相原 1997:27-28 が、「能力容量」あるいは「到達度」などについて述べる“能V”表現の例として、空間名詞を用いた

- (33) 礼堂**能**坐三千人。
／講堂ニハ3000人すわ**レル**。(相原 1997:28)

と、空間性を有するモノ名詞を用いた

- (34) 汽车**能**坐五个人。
／車ニハ5人乗**レル**。(同上)

を一括して挙げていることとも符合する。

ところで、前述したように「属性可能」は無情物の性質としての可能を意味し、本稿ではこの視点か

ら中国語の可能表現をみていこうとしている⁷⁾。但し「属性」という用語については、日本語について述べた高橋ほか 2005:111 の「可能動詞は、主体の属性をあらわすばあいと、対象や状況の属性をあらわすばあいがある」という記述にみられるように、有情物について述べる可能表現の働きを問題とする場合にも用いられることがあるため注意が必要であり、同様のことは渋谷 1993:21-24 の記述からもうかがわれる。この点は中国語の可能形式“会V”の働きを問題とする場合も同様であり、成戸 2019 a :62 で紹介したように、同形式の働きを論じる過程で「属性(性質・特徴)」という用語を用いる勝川 2011 a :106、同 2011 b :167 のようなものがみられるため⁸⁾、「属性可能」の概念を明確にした上で考察をすすめる必要がある。

1.2 日本語の属性可能表現

1.1 で挙げた“能／可以V”表現に対応する日本語可能表現のうち、無情物がVの表わす動作の客体となりえるものである(1)、(1) および(2)~(5)、(26)~(27)、材料となりえるものである(11)~(12)、道具 or 主体となりえるものである(13)、(15)~(18)、空間 or 道具となりえるものである(21)においては、無情物を表わす名詞が「ハ」をともなっている。周知のように、「N・ハ」はNを主題化する形式である⁹⁾。

一方、(6)~(10)の日本語表現においては、無情物を表わす名詞が「カラ」、「デ」によって示されている。「N・ハ」とは異なり「N・カラ」、「N・デ」は述語動詞と直接的に結びついていわゆる連用修飾成分となる形式であり、表現全体は有情物(多くはヒト)の意志による動作が可能であることを表わしている。このため、「N・カラ」、「N・デ」の部分を主題と位置づけ、後続成分との間に「主題+説明」の関係が成立する属性可能表現を構成するという見方は成立しないようにもみえる。しかしながら、(6)~(10)の「N・カラ」、「N・デ」を(11)、(12)の日本語表現のように「N・ハ」の形に置き換えてみると、表現によっては自然さの度合いがやや劣るものの非文とはならないことや、語順が(11)、(12)と同じであること、動作主体が問題とならない点で(11)、(12)と共通していることなどを考え合わせれば、「N・カラ」、「N・デ」の部分を属性可能表現の主題に準ずる成分と位置づけられるのではなかろうか¹⁰⁾。

「ハ」によって無情物を主題化した可能表現の形式としては、成戸 2021:55 で紹介した『日本語文型辞典(【れる₁】の項)』が「ものの性質として可能なことを表す」形式として挙げている「Nハ V-レル」や、同:58 で紹介した小矢野 1981:26 が「事物の性能を表わす用法」として挙げている

(35) この双眼鏡ハ1 キロ先のもの**ガ**見**エル**。
(小矢野 1981:26)

(36) このラジオハ短波放送**ガ**よく聞**コエル**。
(同上)

にみられるような、「N₁に見たり聞いたりする手段としての道具を表わす名詞が用いられる」場合の文型である「N₁ハ N₂**ガ** V」などがある。(35)、(36)の「この双眼鏡」、「このラジオ」はそれぞれ「見る」、「聞く」の道具となりえるものであり、「N₁ハ N₂**ガ** 見**エル**/聞**コエル**」の形で可能表現を構成している¹¹⁾。ついでながら、佐治 1975:85-88 には、

(37) 私ハ山**ガ**見える。(佐治 1975:86)

のような自然可能の「見える」、「聞こえる」を用いた表現や、

(38) あの人ハスキー**ガ**できる。(同上:87)

のような可能の「できる」を用いた表現はいわゆる「総主のある文」であって、「N・ハ」は主題、「ガ～」は叙述部としてNが表わす有情物の状態について説明するものであり、

(39) 山**ガ**見える。(同上)

という表現は、「山が見える状態にある」ことを表わしており、形容詞表現の場合と同様に、状況に対してその属性を認知した表現である旨の記述がみられる。(35)、(36)は、「総主のある文」である点においては上記の(37)、(38)と共通する一方、無情物を主題とする属性可能表現である点においては異なる。

(35)、(36)に対し、井島 1991:151 に挙げられている

(40) この鍵ハあの部屋**ヲ**/**ガ**開**ケ**ラ**レル**。
(井島 1991:151)

(41) このペンハよく書**ケル**。(同上)

の場合はそれぞれ「N₁ハ N₂**ヲ**/**ガ** V(ラ)レル」、「Nハ V(可能動詞)」の形式をとっているが、無情物を主題化した可能表現である点においては同様である¹²⁾。また、『日本語文型辞典(【れる₁】の項)』には、性質を表わす「Nハ V-レル」の例として、無情物が空間となりえるものである

(42) この教室ハ300 人は楽に入**レ**マ**ス**。
(『日本語文型辞典』【れる₁】の項)

が収録されており、これに類似したケースとしては

(43) このベッドハ相撲取りが寝**ラ**レル。
(尾上 1998:79)

が挙げられる。(43)は、尾上 1998:79 が日本語の可能表現について、『ラレル形述語を持つ文』の主語には、動作対象、動作主、場所などがあり得るとした中の、「場所」である例として挙げている表現であるため、「ベッド」が空間と位置づけられていることとなる。しかしながら、「ベッド」は厳密には空間性を有するモノであり、「寝る」に対してそれ自体を提供するという点で(42)の「教室」や(21)の「グラウンド」よりも空間としての性格が弱く、道具としての性格がより強いとみる方が正確であろう¹³⁾。(42)、(43)はいずれも属性可能表現とみてさしつかえない。

前述したように、(6)～(10)の「N・カラ」、「N・デ」は、属性可能表現の主題に準ずる成分と位置づけられる可能性がある。これらに対しては「ハ」を付加して「N・カラハ」、「N・デハ」とすれば主題であることが明確となる。“能/可以V”表現との対応例のうち、材料となりえるものを表わす名詞に「カラハ」を付加した

(29)' 綿花カラハ布を織る**コトガ**デ**キ**、種子カラハ油をしぼる**コトガ**デ**キ**ル。

においては、「N・カラハ」形式による「綿花」と「種子」の対比という形でそれぞれの主題化がなされている。同様のことは、空間となりえるものを表わす名詞を用いた(21)の実線部を「N・デハ」の形にした

(21)' 広いので、あのグラウンドデハサッカーガデキル。

のようなケース¹⁴⁾、同じく空間を表わす成分に「ニハ」を付加した(30)、(33)や

(44) 土地可以種土豆。
／畠ニハじゃがいもを作るコトガデキル。
(大河内 1997:138)

あるいは(42)の実線部を「N・ニハ」の形にした

(42)' この教室ニハ 300 人は楽に入レマス。

のようなケース、空間性を有するモノ名詞を用いた(34)についてもあてはまる。このように、日本語では「デ」、「カラ」、「ニ」によってNが表わす無情物と動作との意味関係(格関係)が示されると同時に、「ハ」によって主題化がなされるケースが存在するのである。但し、前述したように「ハ」のみでは表現の自然さの度合いがやや劣るケースがみられることを考慮に入れば、文頭に置かれた「N・カラ」、「N・デ」が主題に準ずる成分と位置づけられるケースの存在を認めてもさしつかえないと考えられる。このことは、『日本語文法事典(「主題」の項)』が、『〇〇ハ』という形をとっていなくても主題と呼びたいものが多数ある。『主題』を形で定義することはできない」としていることや、高橋ほか 2005:112 が「特性としての可能性」を表わすケースとして挙げている

(45) このあたりデハ、ハゼがよくツレタ。
(高橋ほか 2005:112)

から「ハ」を削除して

(45)' このあたりデ、ハゼがよくツレタ。

としても表現内容にほとんど相違がなく、実線部を主題と位置づけることにとりたてて違和感がないことによっても理解できよう。

ところで、中国語には、材料 or 道具を表わす形式として“用・N”が、空間を表わす形式として“在・N”が存在する。“用”は“在”よりも動詞としての性格が強く、これを前置詞とするか否かの点で見解

が分かれているが、前置詞とされる“在”も動詞としての性格をとどめている。また、動詞表現において“用・N”が文頭に置かれる現象は限定的であるのに対し、“在・N”が文頭に置かれる現象はめずらしくないため、この点からみても“用”は“在”よりも機能語としての性格が弱いこととなる¹⁵⁾。動詞表現に用いられる“用・N”、“在・N”の間にはこのような相違がみられるのであるが、属性可能を表わす“能／可以V”表現の考察にあたっては、無情物を表わすNが“用”、“在”をともなつて“用／在・N”形式をとるケースについてもみていく必要がある。そのようなケースにおいては、動詞としてあつかわれることの多い“用”、動詞的性格をとどめた機能語とされる“在”の特徴からみて、表現にはあらわれていない有情物(動作主体)について述べる可能表現にはなるものの、無情物について述べる属性可能表現にはなりにくいと予測される。このことは、無情物が「具格(instrumental)」となるものである例として大河内 1973:50 が挙げている

(46) 那三毛钱能作什么?
(あの 30 銭でなにができますか?)
(大河内 1973:50)

のようなケースや、無情物を表わす名詞が空間名詞である

(47) 那个操场可以踢足球。

を、それぞれ

(46)' 用那三毛钱能作什么?
(47)' 在那个操场可以踢足球。

と比較することによって確認されるであろう。筆者のインフォーマント調査においては、(46)、(47)は無情物の属性を述べているのに対し、(46)'、(47)'は有情物の行為についてそれが可能であるか否かを述べているという相違があると判断されたため、上記の予測は正しかったことになる。日本語の「カラ／デ」、「デ／ニ」とは異なり、“用”、“在”は純然たる機能語ではない。“用”、“在”が程度の差こそあれいずれも動詞としての性格を備えている(前置詞の多くは動詞から派生したものである)ということからは、“用／在・N”が主題を表わす成分となりえる可

能性に対する否定的要因であり、これらが用いられた「能／可以V」表現を属性可能表現と位置づけることは困難であると言わざるをえない¹⁶⁾。これらのことから、「用／在・N」は、日本語の「N(道具)・カラハ／デハ」、「N(場所)・デハ／ニハ」のような、Nが表わす無情物と動作との意味関係(格関係)を示すとともにNを主題化するという働きを備えてはならず(or そのような働きにとぼしく)、「能／可以V」表現に用いられて属性可能を表わす働きをすることはできない(or そのような働きは弱い)ということができ、この点は「N(道具)・カラ／デ」、「N(場所)・デ／ニ」と比較した場合も同様であると考えられる。

2 “能／可以V” 表現の諸特徴

2.1 “能／可以V” 表現が表わす属性可能

1.1 で述べたように、無情物の「用途」を表わす「能／可以V」表現は属性可能表現であると位置づけることができる。「用途」は「能／可以V」表現が表わす意味の一つではあるものの、辞書などの項目としてはもうけられないのが通例であり、これは「用途」が可能の範疇におさまることによると考えられる。また、日本語可能表現の働きとしては「属性可能」という範疇がもうけられており、「無情物の性質としての可能」を表わす。この点において日本語の属性可能表現は、本稿でとり上げた中国語の「能／可以V」表現と共通点を有するため、両者の対照作業を行なうことができる一方、1.1 でふれたような、有情物を主体とする中国語の「会V」表現は考察対象からはずれることとなる¹⁷⁾。

「属性可能」という切り口から可能表現の対照作業を行なうことにより、先行研究によっては明らかにされなかった両言語間の新たな相違がうかび上がってくるようになる。このような視点から両言語の可能表現について考察を行なった先行研究としては、張麟声 2001、呂雷寧 2006、同 2015 などが挙げられる。呂雷寧 2006:65 には、日本語可能表現には意志動詞が用いられる傾向にあり、非情物や無意志的動作に関する可能表現は周辺的であるのに対し、中国語可能表現には動詞の意志性と事柄の性質による制限がほとんどない旨の記述がみられ、同 2015:155 にはこのような相違から生じる中国語話者による日本語可能表現の誤用例が紹介されている¹⁸⁾。また、張麟声 2001:101-102 には、属性の主が人工的に作ら

れた「道具」の場合は、それを使って行なう動作をコントロールするのは人間であり、動詞は意志性をもつ用法としてあつかわれるため、両言語間で可能形式どうしの対応関係が成立するのに対し、属性の主が自然界のものである場合には意志性をもたないため、中国語可能形式に対して日本語可能形式が対応しない旨の記述がみられる。但し、属性の主が自然界のものであっても可能形式どうしの対応関係が成立する

(48) 这种草药能治肺病。

／この種の薬草ハ肺病を治セル。

(李臨定著／宮田一郎訳 1993:125)

※日本語訳は筆者

のようなケースや、属性の主が自然物の「材料」であっても可能形式どうしの対応関係が成立する(6)、(11)のようなケースが存在すること、自然物を材料に作られたものが属性の主となって可能表現どうしの対応関係が成立する(13)のようなケースが存在することを考えれば、両言語間の対応関係成立の可否については、呂雷寧 2006 の前掲記述にみられるように傾向としてとらえた方がよさそうである((48)については、「この種の薬草」が(13)の「ショウガと黒砂糖のスープ」と同様に擬人化されているため可能表現が成立しているという見方もできよう)。ついでながら、(48)とは異なり、(14)は日本語可能表現との対応関係が成立していないが、これは、1.1 で述べたように日本語可能表現が「願望」を出発点としているため、望ましくない出来事を述べる(14)のようなケースには用いられにくいことによると考えられる。また、

(49) 大蒜能杀菌。／ニンニクハ殺菌効果を持つ。

(《現代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“能”の項)

は(14)と同様に、中国語の可能表現に対して日本語の非可能表現が対応するケースであるが、日本語においては

(49)' ニンニクハ菌を殺すコトガデキル(殺セル)。

よりも自然であり、このことには両言語間における

表現構造の相違¹⁹⁾も関係しているように思われる。

一方、日本語の可能表現に対して中国語の非可能表現が対応するケースもみられ、例えば

- (50) この品ハ好評でよく売**レル**。
 /这货受欢迎很**畅销**。
 (『岩波 日中辞典』「うれる【売れる】」の項)
- (51) この包丁ハよく切**レル**。
 /这菜刀很**锋利【快】**。
 (同上「きれる【切れる】」の項)

のような形容詞表現との対応例が挙げられる。このため、属性可能をめぐる日中二言語の対照作業は、上記のような可能表現どうしの対応関係、中国語可能表現と日本語非可能表現との対応関係のほか、日本語の属性可能表現と属性を表わす中国語形容詞表現との対応関係にまで広がっていきそうであり²⁰⁾、これらの対応関係が成立する要因を探っていくことにより新たな知見が得られる余地は十分に残されていると思われる。作業の過程においては、無情物がVの表わす動作の客体となりえる(1)、(1)′、(2)、(4)のような、「V(ラ)レル」形式の日本語表現が対応するケースに留意しなければならない。成戸 2021:54 で述べたように、同形式をとる表現の中には「可能」、「受け身」のいずれにも解される(or いずれかに傾いている)ケースがみられるからである。

“能V”と“可以V”の相違については、成戸 2019 b:111 においていくつかの先行研究を紹介し、“能”は能力を表わし主格主語を要求することが多いのに対し、“可以”は形容詞的であるため行為者主語があらわれることは少なく、(44)のような表現が普通であるという大河内 1997:138 の記述に端的に示されているとした²¹⁾。また、大河内が(44)について“土地”についての説明文になっている。この点は“能”と対照的である」としていることから、属性可能の表現形式としては“能V”よりも“可以V”の方がふさわしいのではないかという予測もうかんでこよう。確かに、“可以”が形容詞的であるとされる点に着目すれば、「属性可能」を表わす表現形式としては“能V”よりも“可以V”の方が適していると考えたくなる。しかしながら、“能V”が無情物について述べる属性可能表現を構成することも事実であり、主格主語をとることが多いとは言うものの“会V”に比べれば主格主語をとる傾向は弱いと考えられる

ことや、“能V”、“可以V”の否定形が“不能V”であることを考えれば²²⁾、「属性可能」を表わす中国語の表現形式として“能V”よりも“可以V”の方が適していると即断してしまうことは避けた方がよさそうである。ちなみに、“能V”、“可以V”の否定形として“不能V”が用いられる点については、《現代汉语八百词》(“可以”の項)が「用途」を表わす“可以”について、“表示否定, 通常说‘不能’, 不说‘不可以’”として

- (52) 木材不经过防腐处理, 就**不能**做枕木。
 (木材は防腐処理を施さずに枕木にすることはできない。)
 (《現代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“可以”の項)

や、肯定形、否定形が共起する

- (53) 大白菜**可以**生吃, 小白菜**不能**生吃。
 (白菜は生で食べられるが、小松菜は生では食べられない。)(同上)

を挙げていることにもあらわれている²³⁾。(52)と同様のケースとしては、(23)、(27)、(28)や

- (54) 这个菜生的**不能**吃。
 (この野菜はなまでは食べられない。)
 (《中文版 日语句型辞典》【れる】の項)

- (55) 这种蘑菇有毒, **不能**吃。
 (このキノコには毒があるので食べられません。)(松田 2015:19)

が、(53)と同様のケースとしては

- (56) 牛肉**可以**生吃, 猪肉**不能**生吃。
 (牛肉は生で食べられるが、豚肉は生では食べられない。)(古川 2001:112)

※日本語訳は筆者

- (57) 这种机器**可以**自动生产零件, 但**不能**自动装配。
 (この機械は自動的に部品を生産できるが、自動取り付けはできない。)(相原 1997:48)

が挙げられる。(57)は、相原 1997:48 に、“能V”と置き換え可能な“可以V”表現の例として(10)などとともに収録されている。同書および古川 2001 はいずれも学習者向けの参考書であり、(56)、(57)は、両形式の相違をわかりやすく学習者に説明するための典型的用例として挙げられている。

2.2 “能V”、“可以V”の使い分け

無情物について述べる表現に用いられる“能V”、“可以V”の使い分けについて、相原 1997:48-49 は、“能”は基本的には主体の内在能力を表わすものであるから

(58) 这笔钱**能**买三件衣服。(相原 1997:48)

は基本的には『この金額』で服を買える、それだけの力がある」ことを表わし、時に「3枚買うのがぎりぎり精一杯だ」という含意が感じられるのに対し、“可以”を用いた

(58)’ 这笔钱**可以**买三件衣服。(同上)

は「別に差し支えない、実現を妨げない」こと、周囲の客観的情况においてそれをさまたげる要素はないことを表わし、「ぎりぎり3枚買える」か「余裕がある」かはっきりしないという相違がみられるとしている²⁴⁾。また、同:53は、「“能”と“可以”は、一つの事態を本体と情況という相補分布的観点から見たものであると言える場合が多い。“能”は主体指向、“可以”は情況指向である」としており、これに沿ってみれば、(58)の場合は“能买”が“这笔钱”の内在的な力を表わすため属性可能表現に、(58)’の場合は“可以买”が“这笔钱”をとりまく外的環境に比重を置いた成分であるため非属性可能表現(属性を表わさない可能表現)にそれぞれ傾いていることとなる。一方、讚井 1996:59 が

(1) 这块豆腐**能**吃吗?

(1)’ 这块豆腐**可以**吃吗?

は「まだ腐敗していないなど、食べられる条件を備えていて食べられるか」という「主語指向用法」の意味、「食べてもいいですか?」という「談話指向用法」の意味のいずれにも解されるとしていることから、“能V”、“可以V”の働きが時として重なり、

その境界が曖昧となることがうかがわれる²⁵⁾。

ところで、無情物の属性とは異なり、周囲の客観的情况が許すためにできるということは、いわゆる「許可」につながる。相原 1997:51 は

(59) 这辆车**能**坐五个人吗? (相原 1997:51)

は「車の物理的なキャパシティ(容量)」を問題にしているのに対し、

(59)’ 这辆车**可以**坐五个人吗? (同上)

は「交通ルールではどれだけ人が乗れるか、つまり5人乗れば違反になるかどうか」を聞いており、“可以”は「許可」を表わすとしている。同:52-53はさらに、“能”は「そのものの能力」を、“可以”は「人為的規則による許可」を表わすとして

(60) 这衣服**能**穿几年? (相原 1997:52)

(60)’ 这衣服**可以**穿几年? (同上)

(61) 这间房子至少**能**住十年。(同上)

(61)’ 这间房子至少**可以**住十年。(同上)

(62) 这个礼堂**能**坐三千人。(相原 1997:53)

(62)’ 这个礼堂**可以**坐三千人。(同上)

を挙げている。但し、周国龍 2012:14-15 が

(27) 这辆车**不能**开。

(この車は運転できません。)

(28) 这辆车坏了，**不能**开。

(この車は故障していて、運転できません。)

を挙げ、(27)は属性可能に解されやすいのに対し、(28)は属性可能、条件可能(禁止)のいずれに解することも可能であるとしていることから、相原の挙げた“能V”、“可以V”の使い分けが絶対的なものではなく、両者を直接に比較した場合に際立つものであることがみてとれる(相原 1997:52にも同趣旨の記述がある)。このような現象は、讚井 1996:59が“能”にも“可以”のように『条件を備えているか否か』による『～できる、～できない』の表現があります」として挙げている(1)、(1)’において、

両者の働きが重なり合っていることとも符合する²⁶⁾。許可を表わす傾向の強い“可以V”の働きがより鮮明であるケースとしては、例えば古川 2001:112 の

(63) 请问, 这儿可以吸烟吗? (古川 2001:112)

(64) 老师, 这本书可以复印吗? (同上)

が挙げられ、同書はこれらを「習慣、規則、道理的に許されて」できるケースとしている²⁷⁾。「習慣、規則、道理」などによって許されるということは、「許容」という概念によってくることができ、「許容されてできる」は言うまでもなく「可能」の一種であり、この点は、成戸 2019b:110-111 で紹介した大河内 1997:136 が「許容されるからできる場合」の例として

(65) 这里能／可以抽烟。

(ここでタバコが吸える。)

(大河内 1997:136)

のような“能／可以V”表現の例を挙げていることや、呂雷寧 2006:55 が「条件可能」における「条件」を「内的条件」と「外的条件」に分け、内的条件可能表現を「心理的または肉体的原因によって、ある動作や状態をなすことが可能かどうか」を表わすもの、外的条件可能表現を「周囲の情勢や規則などによって、ある動作や状態をなすことが許容されるかどうか」を表わすものとしていることからみても²⁸⁾。

3 “能／可以V”表現の受け身的性格

3.1 「主題+説明」と「意味上の受け身」

1.1 で述べたように、無情物の属性を述べる“能／可以V”表現については、無情物を主題、“能／可以V”を主題に対する説明とするのが中国語の実態に合っている。このことは、“能／可以V”表現の表わす「属性」が潜在的なもの、すなわち、Vの表わす動作を実現する可能性を有する状態であるということと表裏一体をなしており²⁹⁾、状態を表わす点において、“能／可以V”表現は(50)、(51)のような中国語形容詞表現と共通しているということができよう。“能／可以V”表現と形容詞表現の共通点につい

ては、(21)のように形容詞と“可以V”が並列関係にあるケースが存在することや、張志公著／香坂順一訳 1955:133 が「及物動詞のあとに『得』を加えるか、あるいはそのままに『可(以)』もしくは『能(够)』を加えるかしても、やはり被動句をつくることができるが、ただ役割の点からみれば、この述語の用途は主語を描写することにあるのであり、したがって一種の被動式の描写句とすべきである」として

(66) 这种东西吃得／可以吃／能吃。

(これはたべれる。)

(張志公著／香坂順一訳 1955:133)

(67) 他这个人信任不得／不可信任／不能信任。

(かれという人間は信用できない。)(同上)

などの表現例を挙げていること、さらには王了一(王力)1957:118 が「他動詞+“得／不得”」などの形式をとる成分を“描写性仿語”とし、その働きについて“它是等于一个描写词的用途的”としていることからもうかがわれるのではなかろうか。また、大河内 1973:60 が「主題化された主語をもつ文の述語動詞はやはり単純に動作をあらわすものとはいいい難い。もちろん動詞であるが、そのあらわす意味は結局様態的なものである」、「主題化するということは、結局『主体と動作』の関係で動詞文をとらえるものではなく、『主題と説明ないし様態』の関係で動詞文をとらえるもので(形容詞述語文のように)、そのような関係が比較的容易に、基本的語序の上に重なって成立しうるのが中国語の特徴であるといえる」としていること、「したがって動詞が裸でつかわれることはほとんどなく、助動詞やアスペクトを示す助詞や否定詞をともなってあらわれる」とした上で

(68) 话不能这样说。(大河内 1973:60)

を挙げていることは、「主題+説明」の構造をとる動詞表現が形容詞表現に近い性格を帯びることを示唆していると推察される。

“能／可以V”表現が表わす内容を「主題+説明」であるとみた場合、無情物を表わす名詞は“能／可以V”との間にそのような関係を有するのであって、Vとは直接的な結びつきをもたないこととなる。このことは、“能／可以V”表現が動作を実現する可能性を有する状態を表わすこと、すなわち形容詞表現

に近い性格を帯びていることと符合するのであるが、現段階では、動作表現としての性格を全く帯びていないとまでは断定できない。

可能表現が形容詞表現に近い性格を帯びるという現象は、日本語においても観察される。このことは、成戸 2021:58 で紹介したように、小矢野 1981:26 が (35)、(36) について、『見える』、『聞こえる』が「+状態性」という意味素性を持つことによって、事物の属性(この場合は性能)を表わす用法である」としていることや、鈴木 1972:277-280 が、動作動詞と状態動詞という分類で問題になる動詞としていわゆる「可能動詞」があるとした上で、可能相動詞を状態動詞に入れている金田一 1976:9-10 の考え方を紹介し、「可能動詞の語法的な意味の性格は、状況の変化(潜在的なものから顕在的なものへの転化)であって、動作動詞に属するとみるべきではないか」としつつも、「可能動詞は、現在未来形で主として、潜在的な用法に用いられるという点でふつうの動作動詞とちがった特殊な性格をもっているとしなければならない。これは、動作動詞から状態動詞へ移行しつつあるものと位置づけられるかもしれない」としていることにもあらわれている。また、『新版 日本語教育事典(「可能文の諸特徴」の項)』は、「潜在的可能述語は、ル形で現在を表し、テイルと共起しない状態述語であるが、その恒常性を表す度合いに段階があり、それが高い場合には形容詞に近いふるまいをする」とした上で、

(69) このパソコンハデータの処理に使エル。
 (『新版 日本語教育事典』「可能文の諸特徴」の項)

(70) このパソコンハ使エル。(同上)

について、(69)、(70)はいずれもパソコンの性質を述べる表現であるが、後者は形容詞表現と同じように「とても」などの程度副詞が共起してもよく、「使エル」を「使うコトガデキル」に置き換えられないという特徴を有するとしている³⁰⁾。これらの記述からは、日本語の可能動詞が「形容詞に近い性格を有しつつも動詞としての性格をとどめている」こと、「形容詞的な性格の強弱には段階性がみられる」ことがみてとれる。また、可能動詞は「タ」形でいわゆる「実現系可能」を表わすが、「潜在系可能」を表わす「ル」形の場合よりも動作を表わす働きが強いと

いうことができよう。このような可能動詞の特徴は、同じく「可能」を表わす「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」についてもあてはまると考えられる³¹⁾。

ところで、前述したように、中国語の“能/可以V”表現が動作表現としての性格を全く帯びていないとは断定できず、この点についてはさらなる検証が必要である。そのためには、表現には含まれていない動作主体の存在が含意されているか否か、含意されているとすればどの程度であるかについて調べる必要がある。また、無情物がVの表わす動作の客体になりえるものであるケースの場合には、受け身表現としての性格を帯びているか否かについても検証する必要がある。というのも、中国語の受け身表現については従来から、「受け身」のマーカを用いない、いわゆる「意味上の受け身」という考え方がなされてきたからである。このような表現は、「受け身」であることを示す形式上の特徴をもたない点において、日本語の「V(ラ)レル」表現とは対照的である。属性可能を表わす“能/可以V”表現については、これまで繰り返し述べてきたように「主題+説明」とするのが中国語の実態に合っているが、受け身表現としての性格が皆無であるのか否かについては、さらなる分析が必要であろう。

「意味上の受け身」に対して懐疑的な考え方をとるものとしては、大河内 1973、同 1997 がある。同 1973:47-49、53-56、同 1997:115-116 には、文頭に置かれた名詞的成分は「主題」を表わすとする考えの方が合理性においてまさっている旨の記述がみられる。これに対し、中国語にも「格」の存在を認める立場をとる藤堂 1968:334-336 には、Vが表わす動作の客体となりえるものが文頭に置かれた場合には「賓格(目的格)」のままであると考えられる旨の記述がみられ、このことは「意味上の受け身」を肯定する考え方につながる。「意味上の受け身」を認めるか否かをめぐるとこのような見解の相違が“能/可以V”表現について考察する場合にも生じるであろうことは、同表現に「受け身」との関連性をうかがわせる形式的特徴がない点からも予測され、上記のような見解の相違を解消させようとした結果として張志公著/香坂順一訳前掲書における「被動式の描写句」という呼称が生まれたようにも思われる³²⁾。上記のような見解の相違は、意味上の特徴をどの程度まで分析に反映させるかの相違によって生じると推察される。ちなみに、フランス語の受動態、受動

的代名詞について述べた浅野 1998:87 に、統語分析にあたっては発話の意味構造における「動作主→行為過程→被動作主」という流れと「主辞 — 述辞 — 目的辞」とを区別する必要がある旨の記述がみられることから、「主題」が発話の意味構造とは別次元の概念であること、例えば、動作主(本稿でいう「主体」)、被動作主(本稿でいう「客体」)のいずれを指すかというようなこととは切り離された概念であることがみてとれる³³⁾。「意味上の受け身」を肯定した上で“能／可以V”表現の分析を行なう際には、これらの点もふまえた上で慎重に作業をすすめることが求められよう。

ところで、「意味上の受け身」は、「受け身」という言葉が冠せられているからには動作主体の存在が前提となっていると考えられるが、“能／可以V”表現においてはどうかであろうか。大河内 1997 には、「主題+説明」の構造をとる表現が動作主体の存在を含意するか否かについて考える際のヒントになりそうな記述がみられる。同:131 は、

- (71) 衣服**他**洗好了。(大河内 1997:131)
 (71)' 衣服洗好了。(同上)

を挙げ、(71)については「主格があるといわゆる賓語提前になる」、(71)'については「主格がないと自然被動になる」とする一方で、同:130 には、(71)'は対格が主題化された題述文である旨の記述がみられる。いずれの表現例においても“衣服”が主題となっているとともに“洗”という動作の客体となりえるものであるが、(71)は動作主体“他”を含んでいるため、いわゆる「能動表現」であるという見方も可能な点で(71)'とは異なる。大河内は、(71)'のような表現は(71)のように行為者が出ないため賓語提前とはいいいにくく、被動の一種と数えられるにすぎないとしており、自然被動を積極的に認めているわけでもなさそうであるが、このような考え方をとるのは、(71)'が潜在的な動作主体の存在を含意していることをみてとったためと推察される。すなわち、(71)'の“洗好”は「動詞+結果補語」の形であり、このような場合にはいわゆる「自然被動文」が成立するとされる³⁴⁾のであるが、成戸 2020:102-103、109 で述べたように、中国語では動作の過程と結果を分けて表現する傾向が強く、無情物について述べる(71)'のような表現であっても動作主体の存在が(潜在的にはあるが)含意されてい

ると考えられる³⁵⁾。

“能／可以V”は「動詞+結果補語」とは異なって自然被動文とはされないが、Vが客体を必要とするものである場合には、表現の前提となる客観的事実における動作主体の存在を前提とする。このため、形容詞表現と比較した場合には“能／可以V”表現が動作主体の存在を含意することがうきぼりとなる可能性が否定できず、2.1 でふれたような主格主語を要求する強さの度合いにおける“能V”、“可以V”間の差異、すなわち、両者の他動性の高低の差異があらわれることも予測される。このように、“能／可以V”表現が潜在的な動作主体の存在を含意するか否かについての分析を行なっておくことは、同表現が受け身表現としての性格を有するか否かの判断に不可欠であると考えられるのであるが、仮に“能／可以V”表現が受け身の性格を帯びているとしても、同表現における無情物が主題であることは否定されるものではなく、このことは張志公著／香坂順一訳前掲書の記述とも矛盾しない。また、“能／可以V”表現における無情物が客体となりえるものである場合に、これを主題と位置づけることの妥当性は、大河内 1973:56-57 に、いわゆる可能補語を用いた

- (72) **这件事**他办得了。
 (このことをかれはやれる。)
 (大河内 1973:56-57)

について、同表現は

- (72)' 他办得了**这件事**。(同上:57)

の“这件事”を主題化したものであり、“他办得了”はそれについてのある機能を述べている、すなわち“他”は“办得了”という述語の中に組み込まれ、全体として主述述語文とよばれるものとなっている旨の記述がみられることや、同:58 が

- (73) 那本书**他**借走了。
 (あの本はかれが借りていった。)(同上:58)

における“他借走了”のような主格主語を含む動詞述語文について「形容詞述語とパラレルなものとして機能している」、「無題化された動詞文は、たとえ主語を含んでいても全体がある種の様態を示すにすぎない」としていることによっても理解できよう³⁶⁾。

無情物の属性を述べる“能／可以V”表現において潜在的な動作主体の存在が含意されるとすれば、荒川 2003:183 が「主体的な能力があつてできる」ことを表わす例として挙げている

- (74) 生魚片, 你能吃吗?
 (さしみを食べることができますか。)
 (荒川 2003:183)

のような非属性可能表現の場合とは異なり、不特定の動作主体であるということになる。これに対し、(74)と同じく「(あなたは)さしみを食べられるか」とたずねる場面で用いることが可能な

- (74)' 生魚片能^能吃吗?

は、「刺身というものは食べられるものなのか」を表わす属性可能表現として用いることも可能な多義表現であり、前者の場合における主体は相手、後者の場合における主体は不特定である。“能／可以V”表現において潜在的な動作主体の存在が含意されるということは、同表現が動作表現としての性格を帯びることを意味するため、“能／可以V”が属性可能すなわち状態を表わすことや、(74)' のような多義表現が存在することとの整合性をどのようにとるかが課題となろう。

ところで、“能／可以V”表現については、これまで述べてきたような考え方とは異なる視点からのアプローチもできるように思われる。すなわち、“能”は主格主語を要求することが多いのに対し“可以”の場合は少ないという、2.1 で紹介した大河内 1997:138 の記述をヒントとして考えてみるということである。“可以”が形容詞的であるとすれば、“可以V”表現を「意味上の受け身」と位置づける根拠にとぼしくなりそうであるが、前述したように、純然たる形容詞表現と比較した場合には動詞表現としての性格がうきぼりとなることも予測され、もしそうであれば“可以V”表現を受け身表現と位置づけることには一定の合理性があるということになる。一方、主格主語をとる傾向の強い“能”を用いた“能V”表現の場合には、表現にはあらわれていない動作主体の存在が含意される可能性が“可以V”表現よりも高い、すなわち動作表現としての性格が“可以V”表現よりも強いこととなり、「意味上の受け身」と位置づけられる可能性が“可以V”表現よりも高

いことが予測される。このような視点から考察を行なう場合においても、“能／可以V”表現がその基本的性格として「状態性の表現」という特徴を有することとの整合性をとる必要があるようである。この点に関しては、《現代汉语八百词(“被”の項)》が“被”の働きについて“动词后面多有表示完成或结果的词语, 或者动词本身包含此类成份”としていることや、大河内 1997:126-127 が受け身形式の“被V”について“被”をとる動詞は動作性のものでなければならぬとする考えは一般的にある」とした上で、“被”が“着”と共に起しない点に言及していることなどが参考となろう。同様の記述は、学習者向けの参考書である郭春貴 2001:229-230、同 2017:205-206 などにもみられる。これらの記述からは、“被V”表現が表わす「受け身」は「状態」とは相容れない関係にあることがうかがわれる。さらに、“被V”表現がしばしば「被害」のニュアンスをとまなうこととも考え合わせれば、“被V”の受け身形式としての働きは限定的であり、日本語の「V(ラ)レテイル」のような「状態性の受け身」を表わす方法は別に存在するとみるのが自然である³⁷⁾。従って、中国語における“能／可以V”表現(状態表現)が受け身表現としての性格を帯びる可能性については、最初からこれを排除すべきではない。

3.2 フランス語の受動的代名動詞表現との比較

3.1 では、無情物について述べる“能／可以V”表現のうち、無情物がVの表わす動作の客体となりえるものであるケースについては、受け身表現としての性格を帯びているか否かについて検証することが必要であると述べた。もしもそのような性格を帯びているのであれば、可能表現が受け身表現としての性格をも備えていることとなり、“能／可以V”表現を「受け身との関わり」という視点からとらえ直し、その働きを記述することが可能となる。そのため、他言語における可能、受け身の関わりを観察し、それとの対照作業を行なうことが有効な方法の一つであり、これまでは日本語と対照させつつ考察をすすめてきたのであるが、一つの表現形式が「可能」、「受け身」の性格を兼ね備えているという現象は、フランス語の受動的代名動詞表現にもみられる。成戸 2021:54, 59-65 で紹介したように、受動的代名動詞表現は、再帰代名詞の表わす事物に行為が帰ることによって結果的に「受け身」の意味を表わすこととなり、可能モダリティーを表わすという特徴を

有する³⁸⁾。この反面、フランス語代名動詞の用法は「再帰(的)用法」、「相互(的)用法」、「受動的用法(受け身用法)」、「本来(本質)的用法」のように分類されるのが一般的である上、同:72で紹介した

- (75) Les enfants **se lavent** joyeusement.
 (子供というのは楽しく洗えるものだ。／子供達は楽しく体を洗っている。／子供達は楽しく体を洗い合っている。)
 (春木 1993:218)

のような、受け身用法にとどまらず再帰用法、相互用法に解することも可能な多義表現が存在することから、文頭に置かれた名詞的成分が表わす事物を一律に動作の受け手であると位置づけることにはためらいを覚えざるを得ない。これらのことは、林 2004:344 が代名動詞表現について「そもそも再帰用法以外の代名動詞構文(受動用法、中立用法)³⁹⁾は、対応する他動詞構文の直接目的語を主題化してトピックとして文頭に持ってくる構文である」としていることや、「中間構文(受動的代名動詞表現のうち主語が表わす事物の属性を表わすもの)」について「主語名詞のトピック性が高まり、時間を超越した属性記述に特化して、同じカテゴリーの他のものとシステムティックな違いを示す特質を獲得し、独立したグループを形成するに至ったと考えられる」としていることにみられるような、文頭に置かれた名詞的成分を「主題」と位置づける考え方を支える根拠ともなりえる。とは言うものの、「受動的代名動詞」、「代名動詞の受け身用法」という呼称が用いられていること、成戸 2021:63 で紹介したように受動的代名動詞表現が表わすコトガラには潜在的な動作主体の存在が想定されること、さらには後述する「未完了受動型」の受動的代名動詞表現が存在することからみれば、受動的代名動詞表現における無情物が受け手としての性格を帯びるケースが存在することは否定できない。他方、受動的代名動詞表現の中には、

- (76) Le tapis, ça **se lave**.
 (じゅうたんは洗える／洗うものだ。)
 (小熊 2001:75)

のような“SN, ça se V”形式をとるものがあり、「主題化文」あるいは「遊離構文」とよばれる。このような表現の特徴は、春木 1993:215 の記述によれば

「主語を左方遊離して ça で受け直す」であり、“ça”は事物を「範疇」として指すのに適しているとされる⁴⁰⁾。文頭に置かれた無情物はポーズによって後続部分と区切られており、“se V”と直接的な結びつきを有するのは“ça”の部分であるため、“SN(無情物), ça se V”表現における無情物は、通常受動的代名動詞表現におけるそれに比べると主題としての性格がより鮮明であること、すなわち主題化の程度がより高いということがみてとれる。このことは、受動的代名動詞表現における無情物の主題化の程度にも段階性があることを意味している。

一方、中国語における「主題化」については、張麟声 2001:214 において「構文的にはその部分を文頭に持ってくること」、「音声的にはその部分とそのあとに続く部分との間にポーズがあること」とされている⁴¹⁾。また、大河内 1997:131 が「遊離成分」とよばれる主題を含む表現として

- (77) 那个事情我不怪他。(大河内 1997:131)
 (78) 这个问题他做了圆满的解答。(同上)

を挙げ、“那个事情”、“这个问题”は「…ニツイテ」として主題、話題とあつかわれ、

- (71)' 衣服洗好了。

もこれとかわるものではないとしていることから、3.1 でとり上げた「自然被動文」の無情物が主題と位置づけられていることがみてとれるのであるが⁴²⁾、無情物を左方遊離した上に代名詞で受け直すフランス語の遊離構文に比べると主題化の程度は低いように見受けられる。また、属性可能を表わす“能／可以V”表現における無情物がポーズによって後続成分と分離される現象は、前述したように無情物を表わす名詞とVとの間に直接的な結びつきがない点からみて、話し言葉においてはしばしば起こりえると思われる。この点については談話レベルでの分析が必要であるが、フランス語の“SN, ça se V”のようにモデル化することができないものであり、主題化の程度の高さにおいては同形式の“SN”におよばないと考えられる⁴³⁾。

ところで、前述したように受動的代名動詞表現は可能モダリティーを表わすが、これは形式に明示されたものではない。これに対し“能／可以V”表現の場合には、可能の意味が形式に明示されている。

しかしながら、成戸 2019b:111 で紹介した大河内 1997:138 が「一般に助動詞による可能表現は話手の判断であるが、その代表が“能”である。“能”は proposition と modality の関係でいうと最も外のもの、つまりもっともモーダルなものである」としていることから“能V”のモダリティー的性格を認めていることがみてとれる⁴⁴⁾。このことから、モダリティー的性格の強弱における“能V”、“可以V”の差異、さらには可能モダリティーをめぐる“能／可以V”表現と受動的代名動詞表現との相違を明らかにするヒントが得られそうである。一方、「受け身」については、フランス語の受動的代名動詞表現の場合は代名動詞(再帰形式)から結果的に表わされる意味であるとされるため、「受け身」そのものに関しては無標であるといってさしつかえなく、この点においては、受け身に関する形式的特徴をもたない中国語の“能／可以V”表現に近い性格を有するということができよう。この点に着目して分析作業を行なうことは、「可能」、「受け身」の領域にまたがる可能性のある形式として“能／可以V”の働きをみていくことにつながる。但し、受動的代名動詞表現の場合には、前述したような理由から無情物が受け手としての性格を帯びるケースが存在することは否定できない、すなわち受け身表現としての性格を帯びるケースが存在することは否定できないのに対し、中国語の“能／可以V”表現の場合には、無情物と“能／可以V”の関係をどのようにみるか、潜在的な動作主体の存在が含意されるか否かによって受け身表現としての性格を帯びているか否かの判断が左右されるという相違がある。また、受け身との関わりという点でとり上げられるのは、無情物がVの表わす動作の客体となりえるものであるケースに限られるため、無情物が材料 or 道具、空間であるケースをも含めた“能／可以V”表現の特徴として記述するにはおのずと限界がありそうであり、成戸 2021:57 で紹介した寺村 1982:259 が「受動的可能表現(passive potential)」の例として挙げている

(79) この魚ハ食ベラレル。(寺村 1982:259)

にみられるような「可能」と「受け身」の連続性とは性格を異にすると考えられる。“能／可以V”はあくまで可能形式であって、受け身形式としての性格を帯びるケースがあったとしても、日本語の「V(ラ)レル」のように「可能」と「受け身」にまたが

る働きを有するものではない。成戸 2021:70 では、フランス語の代名動詞表現においては日本語の「V(ラ)レル」表現の場合ほど明確な形で「受け身」、「可能」、「自発」の連続性が観察されない点について述べたが、中国語の“能／可以V”表現における「可能」、「受け身」の不連続性は、それとも異なる様相を呈しているのである。三言語の間にみられるこのような「可能」、「受け身」の関係を比較することは、属性可能表現についてのより普遍的な記述につながるはずである。

「可能」、「受け身」の関係をめぐる三言語の相違をみていく際に見逃してはならないのは、「習慣・規範」を表わす受動的代名動詞表現の働きである。成戸 2021:59-65 においては、「習慣・規範」を表わす場合にみられる受動的代名動詞表現の働きを「V(ラ)レル」表現と比較して論じたが、“能／可以V”表現の働きについても同様のことを行なう価値はあると考えられる。この点については、2.2 で紹介した“可以(V)”の働きについての相原 1997:52-53、古川 2001:112 の記述、すなわち「人為的規則による許可」、「習慣、規則、道理的に許されて(…できる、…できない)」が参考となろう。相原は(60)′～(62)′を、古川は(63)、(64)をそれぞれの例として挙げているのであるが、これらは2.2 で述べたように「許容」という概念におさまるもの、すなわち「可能」の一種である一方で、「受け身」の働きから生じる意味ではない。これに対し「V(ラ)レル」表現が表わす「習慣」は、成戸 2021:65 で述べたように受け身の働きから生じる意味である。また、受動的代名動詞表現が表わす「習慣」は、同:60-61、66 で紹介したように、「可能」との間に連続性を有する一方で、「習慣・規範」を表わす「未完了受動型」の受動的代名動詞表現は「可能」を含意する「中間構文型」よりも受け身表現としての性格が強い。これらのことから、「習慣・規範」は、日本語の「V(ラ)レル」表現、フランス語の受動的代名動詞表現においては受け身形式によって表わされる行為であるのに対し、「可以V」表現においては「許容された行為 → 可能な行為」として、可能形式によって表わされる行為であるということができるのであるが、“能V”、“可以V”のいずれによっても「許容されるからできる」ことを表わすとされる(65)のようなケースが存在することから、“能V”表現についても同様のことがあてはまると考えられる。

4 おわりに

以上、本稿では、無情物の属性を表わす“能／可以V”表現を中心として、日本語の属性可能表現、フランス語の代名動詞表現との対照作業を行なうための着眼点や分析方法、予測される結論などについて述べた。系統を異にする言語であるフランス語、中国語の間には、成戸 2018 a、同 2018 b でとり上げた使役形式の“faire/laisser+不定詞”、“叫／让・N+V”や、同 2019 a、同 2019 b でとり上げた可能形式の“savoir/pouvoir+不定詞”、“会／能V”、さらには同 2020 でとり上げた達成を表わす形式の“arriver/parvenir à+不定詞”、“V到”のような、発想のよく似た形式がみられる。その一方で、フランス語においては無情物の属性を表わす場合に代名動詞を用いた受け身表現によって表わされるコトガラが、中国語においては可能表現によって表わされるというように、発想の異なる形式が用いられる現象もみられる。中国語の“能／可以V”表現、日本語の可能表現、フランス語の受動的代名動詞表現の3者間にみられる相違は、同一のコトガラを「可能」、「受け身」のいずれとして表現するかということと深く関わっている。このような相違が反映された異言語間の対応関係に着目することは、属性可能に関わる諸形式の特徴について従来よりも厳密に記述することを可能にするのみならず、異言語間におけるコトガラのとらえ方の相違を明らかにすることにもつながる。本稿でとり上げた表現形式について言えば、成戸 2021:68-69 でもふれたように、「V(ラ)レル」においては「受け身」、「可能」、「自発」が、自動詞においては「可能」、「自発」がそれぞれ連続した関係にある。特に、「V(ラ)レル」については、大野 1978:122-123 が『ル・ラル(口語ではレル・ラレル)』の自発、尊敬、受身、可能という四つの意味の根本は自発、つまり自然の成行きを表わすところにある」としていることからみてもとれるように、「受け身」、「可能」の働きの起点が「自発」にあるにしても、現代日本語ではいずれがより基本的あるいは発展的なものであるかということがあまり問題とはならない。これに対し、フランス語の代名動詞の場合には、“se faire+不定詞”であれば使役表現との対比で形式上も「受け身」であると位置づけられるものの、本稿でとり上げた受動的代名動詞表現においてはそうではなく、この点は「可能」についても同様である。また、中国語の“能／可以V”の場合には、可能形式であることは明白であるものの、受け身形式であ

るか否かについては、無情物を「主題」、「客体」のいずれとみるかによって見解が分かれており、「主題」とみる方が中国語の実態に合っている。しかしながら、中国語の文法論に「意味上の受け身」という考え方が存在すること、無情物が客体となりえるものである場合に潜在的な動作主体の存在を含意する可能性が否定できないこと、有標の受け身形式である“被V”の用法が限定的であり、「状態性の受け身」を表わす働きをもたないことなどから、受け身表現としての性格を帯びる可能性を完全に否定するまでには至らない。これらの言語事実を前にして考えられるアプローチの仕方としては本稿で述べたもののほか、さらに、“被V”表現を受け身の核となるタイプとし、無標の受け身表現を周辺のなものと位置づける方法がある。これは、成戸 2021:72 において、フランス語の代名動詞が受け身表現において中心的な役割を果たす形式ではないとしたことに通じる考え方であり、“能／可以V”表現や、いわゆる「自然被動文」などについて考察を行なう場合にも試みる価値がありそうである。但し、“被”を用いた受け身表現は、動作主体を明示する“被・N+V”形式をとることがあり、同じく受け身を表わす“叫／让・N+V”表現との間に使い分けがみられるため、これらを受け身表現の系列の中でどのように位置づけるかという点にも注意をはらう必要がある⁴⁵⁾。

注

- 1) 古川 2001:112 が中国語助動詞の働きについての記述の中で、「能力」の下位項目の一つとして「環境、条件、材質などから(…できる、…できない)」を挙げていることは、(13)における“姜糖水”の解釈に幅がみられることと関連していると思われる。
- 2) ちなみに、フランス語の受け身表現について考察した藤村 1993:183 には、「動作主、被動作主、受益者、経験者、道具、場所」などの意味役割のタイプの分類基準には必要十分なものはなく、数も定まっていない旨の記述がみられる。
- 3) 「主題」、「説明」はそれぞれ、赵元任著／吕叔湘译 1979:45 の“话题”、“说明”に相当する。「主題」は「題目」ともよばれ、成戸 2009:277-278 では「題目」とした。
- 4) 対比による主題化については大河内 1973:58-59 を参照。大河内は、「対比ということを広く解すれば、主題化された表現一般にみられることであり、対比されるものが同じ文中に明示されているかどうかの差にすぎない」としている。
- 5) 渡辺 1999:150 が、(7)の中国語表現や“铁能做锅。”、“这水能喝。”は“相对永恒的能力”の一つである“客体功能”

- を表わすとしているのは、「属性可能表現」であるということと同義であろう。張麟声 2001:100-101 は、「この酒ハ飲メル。」を「主語に立てる属性の主が動作の対象であるケース」としている。周国龍 2012:13 は、(27)の日本語表現は文脈がなければ属性可能の意味に解されやすいとする一方で、「この車ハ故障していますので、運転デキマセン。」は主に車自体の問題であるから属性可能であると言ってよいとして、(28)の中国語表現とは微妙に異なる判断をしている。ちなみに、周が挙げている「この車ハ車検の期限が切れていますので、運転デキマセン。」は明らかに条件可能である。
- 6) (30)~(32)の“住四个人”、“睡两个人”、“坐五个人”においてはいわゆる「事象化」がなされている。大河内 1973:55 は、「単純化していえば、主題化は主格はもとより、対格であれ与格であれ、すべてを述語動詞の前、文頭にひきだすようにはたらき、事象化は逆に動詞の前にあるべき主格を述語の後にまわすようにはたらく」としている。但し、同:63 は、“三个人坐一条凳子。(その3人はひとつのいすに座る。)”は話題にのぼっていた「3人」についての主題表現であるのに対し、“一条凳子坐三个人。(ひとつのいすに3人座れる。)”のような「××あたりに××」という数量表現は、「ひとつのいす」についての主題表現ではないとしている。
- 7) 日本語の「属性可能」に相当するものは、渋谷 1993:19-24 においては「潜在系の可能」としてとり上げられているほか、『日本語学キーワード事典(「可能表現」の項)』は「この車は時速150キロで走れる。」を、「主体の能力によってある動作が可能であること」を表わす「能力可能」の例として挙げている。中国語、日本語の「属性可能」については、さらに張麟声 2001:95、100-102、呂雷寧 2006:56、同 2015:145-147、周国龍 2012:11、成戸 2021 の注4を参照。
- 8) この点は片桐 2006:159-160 も同様である。“会V”が表わす「属性」については、成戸 2019b:104 でもふれた。
- 9) 「N・デ」を用いた(8)の日本語表現は直訳であり、原文は「この接着剤ハガラスと陶磁器の接着に使エマス。」となっている。「N・ハ」がNの主題化に用いられる点については、『新版 日本語教育事典(「主題」の項)』、『日本語教育事典(「主題」の項)』、『日本語文法事典(「主題」|「主題²」|「主題³」の項)』などを参照。「ハ」に代わって「モ」が付加される「芹菜叶子也能吃。/セリの葉モ食ラレル。(《現代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“能”の項)」のようなケースもある。この点については『日本語文法事典(「主題²」の項)』を参照。
- 10) 成戸 2009:58-59 では、状態および状態変化を表わす動詞表現において「トコロ・デ」が文頭に置かれる「庭デ朝顔が咲いている。」「部屋デ明かりが消えた。」のようなケースにおいては、述語の表わす出来事が主体の存在と密接な関わりをもっている点、「トコロ、主体、V」という語順が存在表現と同じである点に着目して存在表現との近似性について述べた。実線部は主題としての性格を帯びている。
- 11) 森山 2002:4-5 は「手段」、「道具」を異なる意味で用いているが、本稿では「道具」という用語で統一している(成戸 2009:8-30 では「手段」という用語を用いた)。成戸 2021 の注16 では、「見エル/聞コエル」を可能動詞とはしない見方が存在する点について述べた。「Nハ V-レル」、「N₁ハ N₂ガ V」形式の可能表現については、さらに森田 1989:1214-1215 を参照。
- 12) 但し、(40)の「この鍵」は、「あの窓ヲ開けラレル」が続く場合には「あの窓ガ開けラレル」の場合よりも擬人的な能動主体としての性格が強いと考えられる。
- 13) 動作との関係において観察される空間、非空間の相対性に関しては、動詞表現に用いられる「N・デ」の働きについて述べた成戸 2009:19-23 を参照。
- 14) 「N・デハ」を用いた(21)'においては「広い」との間に直接的な結びつきがないため、(21)とは語順が異なることとなる。
- 15) 動詞的性格の強弱にみられる“用”、“在”の差異については《現代汉语八百词》、《現代汉语虚词例释》における“用”、“在”の項を、動詞表現における“用・N”の位置については李臨定 1988:80-81、86-87、90 を参照。
- 16) 藤堂 1968:342-343 に、介詞の役目は後続する名詞の「格」を明示することにある旨の記述がみられることは、前置詞句が述語動詞との直接的な結びつきから開放されにくい(=主題となりにくい)ことを示唆していると考えられる。ちなみに成戸 2009:257 では、“在・トコロ+V+モノ”形式の存在表現における“在”の働きについて「トコロの題述化(対照化)をはばむ」とする松村 1977:7 の指摘をも参考とし、“在・トコロ+V+モノ”におけるトコロの主題的成分としての性格は“トコロ+V+モノ”の場合よりも弱いとした。大河内 1997:130 は位格、具格などが主題化された題述文と考えられるケースとして、“屋里他们睡觉, 我们只好外边过夜。”、“那三毛五毛钱能做什么?”などを挙げている。位格が主題化されたケースとしては、さらに“屋里看书。(部屋で本を読む。)”が挙げられる。
- 17) 渡辺 1999:149-150 は、“当要说明某物(客体)有某种功能时, 也只用‘能’, 不用‘会’”として“这种木料能盖房子。/*这种木料会盖房子。”、“棉花能织布, 棉子能榨油。/*棉花会织布, 棉子会榨油。”を挙げている。呂雷寧 2006:56-58 は、「属性可能表現」における属性の持ち主は、意志のない非情物(正確には「無情物」という用語を用いるのがふさわしい ※筆者補足)であるか、有情物であってもその意志が属性の実現可能性に関わらないものであると上で、1) 事物の本来の性質に関する属性可能表現、2) 機械などの性能に関する属性可能表現、3) 事物に対する評価・事物の価値に関する属性可能表現、の3つに分けている。
- 18) このような誤用例は、呂雷寧 2006 では同:56-57、59、61-65 に収録されている。
- 19) 「表現構造の相違」とは、「表現から統語構造の相違を取り除いてなお残る相違」を指す。この点については成戸 2009:195-196 を参照。
- 20) 周国龍 2012:17 には、日本語の「飲メル」が中国語では可能形式を含む様々な表現によって表わされる旨の記述がみられる。
- 21) “可以”が形容詞的性格を有する点については大河内、荒川の以下のような記述が参考となろう。大河内 1997:138 は、“可以”が形容詞“好”に近い働きをする例として、

- “大学毕业以后, 只要党和人民需要, 当干部固然**可以**, 但是……。(大学を卒業してから党と人民が求めるなら幹部になるのもち論よいが、しかし……。)”を挙げるとともに、“好”が“可以”に代わる成分として用いられている“我原来没有什么**好**讲的。(わたしは別になにもお話できることはありません。)”を挙げている。荒川 2003:187 は、“可以”が形容詞と言ってよい働きをする例として“味道**还可以**。(味はまあまあだ。)”を挙げている。
- 22) 成戸 2019 b :111-112 では、力量(=能力)があつてできることを表わす場合や、周囲の条件(=客観的な条件)からできることを表わす場合に否定表現が“不能”に統合される現象について紹介し、“能”の働きが“可以”のそれよりも広範な領域をカバーしているとした。
- 23) 讚井 1996:59 は“韭菜**不能**生吃。／韭は生では食べ**ラ**レナイ。”、“**?**韭菜**不可以**生吃。”を挙げ、「～できない」という意味の場合には一般に“不可以”を使う習慣がなく、“不能”を使うとしている。これに対し、禁止表現には“不可以”が用いられる傾向にあるようであり、このことは、郭春貴 2001:34-35 が「許可による可能」を表わす例として“那儿**能**游泳吗?(あそこで泳げますか。)”、“这儿**能**抽烟吗?(ここでタバコを吸ってもいいですか。)”を挙げた上で「否定は口語ではあまり“不能”をつかいません(禁止の意味が強い)」としていることや、相原 1997:47 の“这里**不可以**抽烟。(ここではタバコを吸ってはならない。)”のような表現例からもみてとれる。
- 24) (58)の“这笔钱”は相原のいう「主体」に該当する。相原 1997:49 は、さらに“这笔钱**只能**买三件衣服。(このお金では服が3枚しか買えない。)/*****这笔钱**可以**买三件衣服。”、“*****这间屋子**能**住两个人, **也能**住三个人。／这间屋子**可以**住两个人, **也可以**住三个人。(この部屋は2人泊まれるし、3人泊まることもできる。)”のような表現例を挙げている。
- 25) 相原 1997:43 が挙げている“这本书**可以**看看。(この本を読んでみたら。)”も讚井のいう「談話指向用法」に該当すると考えられる。「～してみたら」という「勧め」を表わす“可以”の用法については同:41-44 に記述があり、「会”や“能”と最も紛れないもの」であるとしているが、“能”が全く使用不可というわけでもなさそうである。
- 26) 郭春貴 2001:34-35 は“能”の用法の一部として「条件による可能」、「許可による可能」を挙げているが、“可以”については「条件や許可によりできることを表すだけです」としている。同様の記述は荒川 2003:186 にもみられ、“可以”の用法として「客観的条件があつてできる」ことを表わす用法、「許可」を表わす用法を挙げている。これらはいずれも学習者向けの参考書における記述であり、“能”、“可以”の特徴をわかりやすく説明することに主眼が置かれている。成戸 2019 b :110-111 では、“能V”、“可以V”がそれぞれの主たる働きを異にしながら両形式のいずれも許容される領域が存在すること、使い分けが絶対的なものではなく傾向にとどまっていることについて述べた。
- 27) ちなみに、古川が否定形の例として“骑自行车**不能**带人。”を挙げていることや、《现代汉语八百词(“可以”の項)》が「許可」を表わす“可以”の用法について「否定用‘不可以’或‘不能’」としていることから、禁止を表わす場合においても“不能”との役割分担の境界が微妙なものであることがうかがわれる。注 23 を参照。
- 28) ついでながら、渡辺 1999:151 には“条件許可”と“規則”との関係および“能V”、“会V”の成立の可否についての記述がみられる。
- 29) 可能形式が「状態」を表わす働きを有するのは日本語においても同様である。この点については成戸 2014:31-32、成戸 2019 b :109-110 で述べた。
- 30) この部分の記述は渋谷勝己による。渋谷 1993:20 にも「潜在系の可能」の形式について、「形容詞化の度合にはいくつかの段階がある」という記述がみられる。成戸 2021 の注 22 においては、「この鋸はよく切**レル**。(森田 1989:1215)」、「この魚は食**エル**。(渋谷 1993:23)」の「切**レル**」、「食**エル**」が形容詞に近い性格を帯びているとした。中国語との対応例である“这个酒**能**喝。／この酒は飲**メ**マス。(周国龍 2012:11)”、“大分的烧酒还凑合着**能**喝。／大分の焼酎はまあまあ飲**メル**。(張麟声 2001:101)”においては、飲めない可能性もある「水」について述べた“这水**能**喝。／この水は飲**メル**。(渡辺 1999:150 ※日本語訳は筆者)”の場合よりも「飲**メル**」の形容詞的性格が強いと考えられる。
- 31) 「**タ**」形が表わす「実現系可能」については成戸 2020:105-106 でとり上げ、可能形式が「**タ**」形をとることによって起こる意味の変化は、「可能→達成」という方向性、換言すれば「状態→動作」という方向性を有するとした。ちなみに、「売**レル**」の「**タ**」形を用いた日本語に対して中国語の動詞表現が対応する“その本は100万部売**レ**タ。／那本书**销**了一百万部。(『岩波 日中辞典』「うる【売れる】」の項)”のような例からは、動作を表わす働きがより強い「**タ**」形の特徴がみてとれそうである。
- 32) 大河内 1997:133 によれば、「被動式の描写句」についての記述は张志公の改定本では削除されているとのことであるが、「意味上の受け身」をめぐる見解の相違が影響し、考察の限界が感じられたためではなからうか。1.2 で挙げた(40)、(41)の「N(無情物)・ハ」について井島 1991:151 が「道具格」としていることは、中国語を対象とした藤堂の考え方に通じるようにもみえるが、形式上は「道具格」とは言い難い。
- 33) この点についてはさらに『日本語文法事典(「主題¹」、「主題²」、「主題³」の項)』、成戸 2021 の注 68 を参照。大河内 1973:55-56 は「…、主題化や事象化での語序の変更を説明するには、この基本的な『S・V・O』の上に主題化や事象化の要請が重なっていったと考えるのである」、「…、したがって主格を主題化してのべる文では『S・V・O』と主題化の要請が一致しているわけで、表面は『S・V・O』そのものとかわりはないが、なお根底には主題化の意図がはたらいている」、「対格や与格であっても、主題化しようとするば前に移すことが同時に可能なわけである」としている。同:53-56、同 1997:129-132 には、主題化(題述化)についての記述がみられる。中国語における主題化の問題について論じたものに澤田・中川 2004 がある。
- 34) 「自然被動文」については、王建康 2000:308-311、成戸 2009:277-278 を参照。ちなみに、大河内 1997:132 には“English I speak, but French I don't.”のような英語表現においては主語 I の省略がありえない旨の記述がみ

られ、このことは能動表現であることを示している。上記の表現は、英語のトピック構文について論じた西光 2004: 119-120 において「ある特定の集合から引き出されてコントラストをする」タイプとされているものに該当する。

- 35) この点については成戸 2009:278 を参照。ついでながら、動作主体の存在が(潜在的にはあるが)含意されているという特徴は、成戸 2020:109 で述べたように「動詞+結果補語」構造の延長線上にある、いわゆる可能補語を用いた表現にも備わっている。
- 36) 但し、(72)、(73)についての大河内の指摘は、(71)についての同 1997:131 の記述とは異なっており、考え方が修正されたようにも見受けられる。
- 37) “被V”表現の用法が限定的である点については、さらに大河内 1983:37 を参照。成戸 2009:274-295 でとり上げた“モノ+V+在・トコロ”表現は、「モノのトコロにおける存在」を前提として用いられる場合には「モノは(=モノについて言えば)、動作を受けた結果としてトコロに位置する」という内容を表わすため、受け身表現としての性格を有するとともに、「位置する」という状態を表わす表現としての性格をも備えていることになる。
- 38) 成戸 2021:60-61 では、受動的代名動詞表現の働きを論じる際には「可能」、「可能性」の概念規定を厳密にする必要がある点について述べた。
- 39) 代名動詞構文の働きのうち、動作主が存在が想定されないコトガラを表わす場合のそれを「中立(的)用法」という。同用法については成戸 2021:65-68 で考察を行なった。
- 40) これらの点については成戸 2021 の注 37 で述べた。SN は名詞句を表わす。
- 41) これに対し藤堂 1968:336 は、「NP₂, NP₁+VP のように、NP₂(客語の名詞フレーズ)を文頭に引き出し、短いポーズ [,] をおいてから、NP₁+VP と続けるのが、いわゆる客語引き出しの型である」としている。
- 42) 大河内 1997:131 は、(77)、(78)とともに“这口袋我还要用呢。”、“那菜园子我不种了。”を挙げている。この場合の“这口袋”、“那菜园子”は「遊離成分」ではない。
- 43) 成戸 2022 の(57)は、属性可能を表わす“能V”表現における無情物がポーズによって分離されているケースである。『日本語文法事典(「主題²」の項)』には、主題を表わす代表的手段として『「は」のような主題のマーカーを用いる(形態)』、「文の前の方におくという語順(文法)」、「後にポーズをおくような音調(音声)」が挙げられ、言語によっていずれを用いるかが異なる旨の記述がみられる。
- 44) このことは、いわゆる「法助動詞(modal verb)」がモダリティをになう形式の一つであるとされることとも符合する。この点については、成戸 2021:60 で紹介した『研究社 日本語教育事典(「モダリティ(modality)」の項)』を参照。
- 45) ≪現代漢語八百詞(“被”の項)≫は“被V”における“被”を“助詞”、“被・N+V”における“被”を“介詞”と示している。“被”と同様の性格をもつものに“給”があるが、郭春貴 2001:233 では方言の色が濃いとされている。“叫/让”の場合は“叫/让・N+V”形式で用いられるのが通例である(“让”はこの形式のみ可)。これらの点については≪現代漢語八百詞(“叫²(教)”、“让”の項)≫、『中国語虚詞類義語用例辞典(“被 叫 让 给”の項)』、

郭春貴 2001:232 などを参照。成戸 2018 b :73 で紹介したように“叫/让・N+V”は使役形式と同形である点で“被・N+V”とは異なり、“給・N+V”も同様に使役形式と同形である。

参考文献

- 相原茂 1997. 『謎解き中国語文法』, 講談社現代新書。
- 浅野幸生 1998. 「他動性と言語形式 — 受動形と受動的代名動詞形の比較を通じて —」, 東京外国語大学グループ≪セメイオン≫『フランス語を考える フランス語学の諸問題II』, 三修社, 80-88 頁。
- 荒川清秀 2003. 『一步すすんだ中国語文法』, 大修館書店。
- 井島正博 1991. 「可能文の多層的分析」, 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』, くろしお出版, 149-189 頁。
- 王建康 2000. 「日中言語対照の諸問題」, 『日本と中国ことばの梯 佐治圭三教授古稀記念論文集』, くろしお出版, 307-323 頁。
- 大河内康憲 1973. 「日中対照文法論 — 主語及びそれとかかわる問題 —」, 『国語シリーズ別冊2 日本語と日本語教育 — 文法編 —』, 文化庁, 45-65 頁。
- 大河内康憲 1983. 「日・中語の被動表現」, 『日本語学』1983 年4月号, 明治書院, 31-38 頁。
- 大河内康憲 1997. 『中国語の諸相』, 白帝社。
- 大野晋 1978. 『日本語の文法を考える』, 岩波新書。
- 小熊和郎 2001. 「代名動詞」, 東京外国語大学グループ≪セメイオン≫『フランス語学の諸問題 [I]』, 三修社(2版), 74-87 頁。
- 尾上圭介 1998. 「文法を考える 5 出来文(1)」, 『日本語学』1998 年6月号, 明治書院, 76-83 頁。
- 郭春貴 2001. 『誤用から学ぶ中国語 — 基礎から応用まで —』, 白帝社。
- 郭春貴 2017. 『誤用から学ぶ中国語 続編2』, 白帝社。
- 片桐光知子 2006. 「“会”と“能”の使い分け — 一般的な能力を表す場合を中心に —」, 『日中言語対照研究論集』第8号, 日中対照言語学会(白帝社), 152-164 頁。
- 勝川裕子 2011a. 「可能の助動詞“会”の表現機能と『上手い』への派生について」, 『中国語教育』第9号, 中国語教育学会, 101-114 頁。
- 勝川裕子 2011b. 「可能の助動詞“会”の属性描写機能」, 『日中言語対照研究論集』第13号, 日中対照言語学会(白帝社), 163-177 頁。
- 金田一春彦 1976. 「国語動詞の一分類」, 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房, 5-26 頁。(原著は『言語研究』第15号, 日本言語学会(1950), 48-63 頁に掲載)
- 倉石武四郎・折敷瀬興編『岩波 日中辞典』, 岩波書店(1983)。
- グループ・ジャマシイ編著『日本語文型辞典』, くろしお出版(1998)。
- グループ・ジャマシイ編著≪中文版 日本語句型辞典(『日本語文型辞典』中国語訳 簡体字版)≫, くろしお出版(2001)。
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆編集『日本語学キーワード事典』, 朝倉書店(1997)。
- 小矢野哲夫 1981. 「現代日本語可能表現の意味と用法(III)」, 『大阪外国語大学学報 54 言語編』, 21-34 頁。
- 近藤安月子・小森和子編『研究社 日本語教育事典』, 研究社(2012)。

- 佐治圭三 1975. 「日本語構文の特質 — 主語と述語, 主題, 主格など —」, 『国語シリーズ別冊 2 日本語と日本語教育 — 文法編 —』, 文化庁, 67-93 頁。
- 讃井唯允 1996. 「助動詞(能, 会, 可以)」, 『中国語』1996 年 10 月号, 内山書店, 56-59 頁。
- 澤田浩子・中川正之 2004. 「中国語における語順と主題化 — 主題化とその周辺概念を中心に —」, 益岡隆志編『シリーズ◎言語対照 <外から見る日本語> 第 5 巻 主題の対照』, くろしお出版, 19-42 頁。
- 渋谷勝己 1993. 「日本語可能表現の諸相と発展」, 『大阪大学文学部紀要』第 33 巻第 1 分冊, 1-260 頁。
- 周国龍 2012. 「何故日本語は曖昧だと思われるのか(4) — 可能表現に関する日中対照の視点から —」, 『鈴鹿国際大学紀要』CAMPANA No. 19, 9-19 頁。
- 鈴木重幸 1972. 『文法と文法指導』, むぎ書房。
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈 2005. 『日本語の文法』, ひつじ書房。
- 高橋弥守彦・姜林森・金満生・朱春躍編著『中国語虚詞類義語用例辞典』, 白帝社(1995)。
- 張志公著/香坂順一訳 1955. 『中國文法基礎』, 江南書院。
- 張麟声 2001. 『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉 20 例』, スリーエーネットワーク。
- 寺村秀夫 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第 1 巻』, くろしお出版。
- 藤堂明保 1968. 「客語の文頭への提前と『格』の考えの導入」, 『藤堂明保 中国語学論集』, 汲古書院(1987), 334-343 頁。
- 成戸浩嗣 2009. 『トコロ(空間)表現をめぐる日中対照研究』, 好文出版。
- 成戸浩嗣 2014. 『日中・日仏対照研究』, 好文出版。
- 成戸浩嗣 2018 a. 「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(上) — 中国語・日本語の視点から —」, 『現代マネジメント学部紀要』第 6 巻第 2 号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 29-49 頁。
- 成戸浩嗣 2018 b. 「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(下) — 中国語・日本語の視点から —」, 『愛知学泉大学紀要』第 1 巻第 1 号, 愛知学泉大学, 63-82 頁。
- 成戸浩嗣 2019 a. 「フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論 — “savoir/pouvoir+不定詞”と中国語・日本語の可能表現(上) —」, 『愛知学泉大学紀要』第 1 巻第 2 号, 愛知学泉大学, 53-66 頁。
- 成戸浩嗣 2019 b. 「フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論 — “savoir/pouvoir+不定詞”と中国語・日本語の可能表現(下) —」, 『愛知学泉大学紀要』第 2 巻第 1 号, 愛知学泉大学, 103-116 頁。
- 成戸浩嗣 2020. 「達成を表わす表現をめぐる対照研究方法論 — フランス語の “arriver/parvenir à+不定詞” 表現とそれに対応する中国語・日本語表現 —」, 『愛知学泉大学紀要』第 2 巻第 2 号, 愛知学泉大学, 97-114 頁。
- 成戸浩嗣 2021. 「受け身・可能・自発をめぐる日仏対照研究方法論 — フランス語の代名動詞表現と日本語の『V(ラ)レル』表現、自動詞表現 —」, 『愛知学泉大学紀要』第 4 巻第 1 号, 愛知学泉大学, 53-81 頁。
- 成戸浩嗣 2022. 「平井勝利教授の『中国語教師養成講座』 — 日本語話者に対する中国語教育 —」(本号掲載)
- 西光義弘 2004. 「英語のトピック構文」, 益岡隆志編『シリー
- ズ◎言語対照 <外から見る日本語> 第 5 巻 主題の対照』, くろしお出版, 115-213 頁。
- 日本語記述文法研究会編『現代日本語文法②』, くろしお出版(2009)。
- 日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』, 大修館書店(2005)。
- 日本語教育学会編『日本語教育事典』, 大修館書店(縮刷版 1987)。
- 日本語文法学会編『日本語文法事典』, 大修館書店(2014)。
- 林博司 2004. 「フランス語における中間構文と代名動詞構文」, 影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型 — 柴谷方良教授還暦記念論文集』, くろしお出版, 337-356 頁。
- 春木仁孝 1993. 「代名動詞 — 受動的用法と中立的用法を中心に —」, 大橋保夫ほか著『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, 212-218 頁。
- 藤村逸子 1993. 「文のさまざまな形 フランス語の受動態とその周辺 — 日本語との比較対照 —」, 大橋保夫ほか著『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, 169-193 頁。
- 古川裕 2001. 『チャイニーズ・プライマー — New Edition —』, 東方書店。
- 松田春奈 2015. 「日本人中国語学習者の誤用とその教授法・中国語の教科書の問題点について — 可能・可能性を表す助動詞“能”と“会”を中心に」, 『名桜大学紀要』第 20 号, 15-28 頁。
- 松村文芳 1977. 「存在文の意味論研究」, 日本語と中国語対照研究会編『日本語と中国語の対照研究』第 2 号, 1-11 頁。
- 森田良行 1989. 『基礎日本語辞典』, 角川学芸出版(10 版 2005)。
- 森山新 2002. 「認知的観点から見た格助詞デの意味構造」, 『日本語教育』第 115 号, 日本語教育学会, 1-10 頁。
- 李臨定著/宮田一郎訳 1993. 『中国語文法概論』, 光生館。
- 呂叔湘主編/牛島徳次・菱沼透監訳『中国語文法用例辞典 — 《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』, 東方書店(改訂版 2003)。
- 呂雷寧 2006. 「使用範囲から見た日中両言語の可能表現」, 『ことばの科学』第 19 号, 名古屋大学言語文化研究会, 53-66 頁。
- 呂雷寧 2015. 「認識モダリティとの関連性から見た日本語における『可能』の本質」, 『日本語と中国語のモダリティ』, 日中対照言語学会(白帝社), 143-159 頁。
- 北京大学中文系 1955・1957 級语言班編『現代汉语虚词例释』, 商务印书馆(1982)。
- 渡边丽玲 1999. 「<助动词“能”与“会”的句法语义分析 — 以表示能力与可能性为中心>」, 『現代中国語研究論集』, 現代中国語研究会(中国書店), 147-156 頁。
- 李臨定 1988. 『汉语比较变换语法』, 中国社会科学出版社。
- 呂叔湘主編『現代汉语八百词(增订本)』, 商务印书馆(1999)。
- 王了一 1957. 『汉语语法纲要』, 上海教育出版社(新 1 版 1982)。
- 张志公 1953. 『汉语语法常识』, 中国青年出版社。
- 张志公 1959. 『汉语语法常识(改定本)』, 上海教育出版社(新 3 版)。(采华书林)
- 赵元任著/呂叔湘译 1979. 『汉语口语语法』, 商务印书馆。

(原稿受理年月日: 2021 年 12 月 16 日)